

「男、突っ走る！」

第82回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

鬼橋頭岡	長野	河辺	熊瀬	花木	石井	大坂	佐藤	富永	山森	前川	藤田	野倉	谷岡	阿川	橋崎	田所	本村	山田	国中	国枝	鈴木	木内	木内	木内	木内	木内
翔子	優美	真理	怜恵	怜奈	麗子	美央	美美	麻茜	直海	啓司	昇平	浩太	典江	武久	俊悟	晴子	敦臣	正夫	佐雄	佐代子	良江	健次郎	真保	孝志	雅也	雅也
(73)	(17)	(21)	(17)	(23)	(24)	(16)	(21)	(22)	(18)	(29)	(21)	(21)	(56)	(37)	(48)	(62)	(54)	(43)	(57)	(58)	(69)	(19)	(50)	(52)	(23)	(23)
舞台俳優 舞台女優	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	劇団主宰者	振付師	WEB会社社長	市民映画プロデューサー	音楽プロデューサー	劇団主宰者	佐代子の夫	市民映画プロデューサー	元広告制作会社営業担当	雅也の弟	雅也の母	雅也の父	『オフィスツリーイン』代表	『オフィスツリーイン』代表

1 中央交流センター・表

雅也が立っている——橋崎がやってくる。

橋崎「おはよう、うちー」

雅也「おはようございます」

橋崎「いよいよ、本番だね」

雅也「はい……緊張してきました……」

と、男性の音がする。

男性の声「おはようございます」

振り向く雅也と橋崎——正雄がやってくる。

雅也「おはようございます」

橋崎「おはようございます」

正雄「今日、お手伝いさせていただきます。

国枝正雄と言います。いつも妻がお世話になってます」

雅也「妻……。あ、もしかして」

橋崎「国枝さんのご主人」

正雄「仕事で一時的に帰国してたんですが、ちょうどミュージカルの本番と重なって、

今日はお手伝いに召集されました」

雅也「よろしくお願いします」

## 2 同・ホール

山中、阿川、橋崎、その他スタッフたち  
ちが、音響と照明のセッティングをしている。

床置きマイクのテストをしている本村。

N 「前日まで、会場のホールを別団体が使用していたため、前日仕込みができず、当日の朝からリハーサルを始めるまでの約二時間  
間で会場と照明の仕込みをしなければいけませんでした。ヤマさん、阿川さん、そしてボランティアスタッフ総動員で準備が進められていました。同じ頃、楽屋では……」

## 3 同・第一楽屋

衣装を着た直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美、翔子がそれぞれメイクをしている——田所や

ボランテイアスタッフが手伝いをして  
いる。

#### 4 同・第二楽屋

衣装の着替えをしている雅也、浩太、

昇平、啓司、橋岡——と、ノック音が

して、佐代子と伴われた谷岡典江

(56)が入ってくる。

佐代子「うっちー」

雅也「はい？」

佐代子「牛のメイク、この谷岡さんにやって

もらって。劇団主宰してる方で、そういう

の詳しいから」

谷岡「谷岡典江です。よろしくお願いします」

雅也「よろしくお願いします」

谷岡、メイク道具を取り出すと、雅也のメイ

クをしていく。

佐代子「(浩太たちに) どう、ついに本番だ

けど」

浩太「舞台の本番って、こんなに緊張するん

ですね」

昇平「何度も舞台に立ってますけど、これが一番緊張するんですよ」

啓司「人前に立つの、久しぶりすぎて緊張しました」

橋岡「この緊張感は、何とも言えないんだよね。いくら数重ねても、この緊張感っていうのは消えないもんなんだよ」

佐代子「（微笑むと）じゃ、また後ほど」

## 5 木内家・居間

出かける支度をした真保と健次郎が入ってくる——釣りの支度をしている孝志。

孝志「あれ、二人とも出かけるのか？」

健次郎「言っただろ、今日は兄貴が出演するミュージカルの本番だって」

孝志「ああ、あれ今日だったか？」

真保「今日も釣り？」

孝志「夕方から、ちょっとだけ行ってくる」

真保「あ、そう」

健次郎「早くしないと。駐車場も混み合うぞ」

真保「そうね。じゃあ、行ってきます」

孝志「行ってらっしゃい」

## 6 中央交流センター・表

祭りの会場となっており、人の行き交いが激しい。

## 7 同・廊下

受付で、販売用パンフレットを並べている佐代子。

ホール前に行列ができている——田所が、『最後尾』のパネルを掲げている。行列の中に、鈴川、真保、健次郎の姿もある——正雄が当日パンフレットを行列客に配っている。

正雄「こちら当日パンフレットです。お時間までもう少しお待ちください。よろしくお願ひします」

8 同・楽屋前の廊下

衣装とメイクを終えた雅也、浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美、橋岡、

翔子が待っている――佐代子、山中、

本村、田所、橋崎、阿川が入ってくる。

佐代子「お客さん、すごい行列になってるわ。

みんな、これまでの稽古の成果を全力で出し切ってよ」

一同「はい」

山中「まもなく開場をします。開場になると、舞台の方にも行けないので、今のうちに各自確認すべきことをしておくように」

一同「はい」

山中「それと、せっかくなのでこのメンバーで、円陣を組みましょう。円陣の掛け声は、うちー考えてきた？」

雅也「はい。僕が、『未来に向かって、僕ら』と言ったら、右足をポンと出して全員で



『スリジェネ!』と叫んでください」

浩太「オツケー!」

雅也「じゃあ、みんな行きますよ」

一同、肩を組み合って円陣を組む。

雅也「これまでの稽古の全てを出し切って、  
楽しんでいきましょう。未来に向かって、

僕ら」

一同「スリジェネ!」

と、右足を出すと、一斉に拍手をする。

佐代子「よろしく願いしますッ」

山中「よろしく願いします」

雅也「頑張っていていきましょうッ」

## 9 同・ホール

スタッフがドアを開ける。

スタッフ「開場です。皆さん、足元気を付けてお入りください。全席自由席となっております」

来場客たちが、ぞろぞろと入ってくる

——その中に、鈴川、真保、健次郎の

姿もある。

と、舞台袖からその様子を見ている浩  
太と麻美。

浩太「結構いるな」

麻美「そうね」

10 同・楽屋前の廊下

雅也が落ち着かない様子で、地団駄を  
踏んだり、手のひらに『人』と書いて  
飲み込んでいる――女子トイレから麗  
子が出てくる。

麗子「あれ、うちーさんどうしたんです  
か？」

雅也「何だか落ち着かなくて……。今、心臓  
バクバクです」

麗子「大丈夫です。うちーさんは、ちゃん  
と稽古してきたんですから」

雅也「そうですね……。麗子姐さんも、仕  
事で忙しいのに、よくここまで」

麗子「七月末は、成績つけるのが大変でした

けどね。うちーさんこそ、運営との兼任

大変だったでしょ」

雅也「いえいえ」

と、浩太と麻美が戻ってくると、

浩太「席、満席だぞ。二百席」

麻美「すごいことになってる」

雅也「やめてよ、今すぐく緊張してるんだから、そういうこと言うの」

浩太「笑顔だぞ、うちー」

雅也「分かってるよ。俺ね、学生時代から、本番直前が一番緊張するのが抜けなくてさ」

麻美「でも、いざ本番始まったら、大丈夫なんでしょう？」

雅也「まあね。ただ、本編もだけど、前説が緊張してる」

麻美「あれだって、ちゃんと稽古したんだから大丈夫だって」

と、佐代子の声がある。

佐代子の声「まもなく開演しまーす」

雅也「開演だ……」

会場が暗くなっている——それぞれ観客席に座っている鈴川、真保、健次郎。と、音楽が流れ、ステージに明かりがつくと同時に、衣装に身を包んだ出演者一同が出てきて、オープニングダンスを踊る雅也、浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美。

× × ×

ステージを見ている鈴川。

× × ×

ダンスが終わり、それぞれが決めポーズ——観客たちの拍手。

下手はけの浩太、優美。上手はけの太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵。

雅也、それぞれがはけるのを確認すると、舞台センターに来て、

雅也「皆さん！ こんにちは！」

観客たち「こんにちは！」

雅也「もう一回行ってみましょう！ こんにちは」

ちは！」

観客たち「こんにちは！」

雅也「本日は、市民ミュージカル『七夕物語』

にご来場いただきまして、誠にありがとう

ございます。こちらのホール、大変優秀で

して、声がとても反響します。本日初めて

舞台に立つキャストもおりますので、応援

したい気持ちは分かりますが、そういう時

は『頑張って！』と声はかけずに、皆さん

の心の中で声援を送っていただけたらと思

います。そして何よりキャストの皆さんが

演技に集中できるように、携帯電話、スマ

ートフォンはマナーモードにしてください

か電源をお切りくださいますようお願いし

てください。それでは、『七夕物語』

最後までごゆっくりお楽しみください」

と、深々と一礼をする——拍手をする

観客たち。真保や健次郎も拍手をする。

雅也、下手にはけていく——舞台袖で  
待っている浩太と優美。

雅也「（小声で）緊張した……」

浩太「（小声で）良かったよ」

優美「（小声で）さすがうちー」

雅也「（小声で）ありがとう」

× × ×

翔子「むかーし、むかし。天の世界には、織  
姫様と彦星様という方が住んでいました。

天の世界の人々は、不思議な力を持って  
いました」

忍「（孫の役で）おばあちゃん、不思議な力  
って、何？」

麻美「（孫の役で）織姫と彦星って、確か一  
年に一回しか会えないんだよね？」

翔子「そうよ。実はおばあちゃん、昔、天の  
世界に行ったことがあるの」

忍「本当に？」

麻美「すごい！」

翔子「今でも覚えてるわ、あの不思議な出来事を……」

暗転し、翔子、忍、麻美が上手にはける——明転すると、会場後ろの階段からそれぞれ麗子、怜奈、美央が入ってくる。

麗子「織姫様？」

怜奈「どこですか、織姫様？」

美央「織姫様！ どこにいますか？」

麗子「どこへ行ってしまったのでしょうか、織姫様は」

と、昇平が上手から入ってくる。

昇平「どうしたんだ、騒々しい」

怜奈「お兄様」

美央「それが……」

麗子「織姫様がいなくなってしまったのです」  
昇平「困ったな。間もなく天帝様が来られる時間だというのに」

×

×

×

舞台後ろから全体を見ている佐代子。

× × ×

麗子、怜奈、美央、橋岡、茜が集まっ  
ている。

橋岡「織姫の姿が見えないようだが」

麗子「それがですね、天帝様。織姫様は今、  
体調を崩されて」

橋岡「何ッ！ それは見舞いに行かなければ」

麗子「（慌てて止めて）いえ、ご病気が移っ  
てはなりません」

橋岡「それもそうか」

茜「天帝様。そろそろ、会議のお時間です」

橋岡「ええ、今来たばかりなのに」

茜「ほら、行きますよ」

と、橋岡の手を取り、階段を上って去  
っていく。

橋岡「おい、こら、離せ」

会場に笑いが起こる。

× × ×

会場後ろから本村が見ている。

× × ×



直海が舞台上を歩いている――下手から美央が出てくる。

美央「あの、香苗さんですね」

直海「そうですけど、あなたは……？」

美央「私はミシヤ。天の世界に住む鳥です」

直海「天の世界？」

美央「実は織姫様がいなくなっちゃって、機を織る人を探しているのです。織姫様が見つかるまで、代わりをお願いします」

直海「え、私が……？」

美央「さ、天の世界へ参りましょう」

直海「機折ったことないけど、大丈夫？」

美央「私が一から教えますから」

直海「よく分からないけど、それで人助けになるんなら」

美央「では参りましょう」

と、直海の手を引いて上手へはけていく。

× × ×

真保が舞台全体を見ている。

×

×

×

舞台上をさまよっている優美。

優美「ここは、どこ？」

と、忍と麻美を伴った真理恵が上手から入ってくる。

真理恵「ここは北極星よ。外の世界には、魔

法がなければ出られないわ」

優美「あなたは……北極星の魔女」

忍「私は、魔女様に使える犬だワン」

麻美「そして私が、魔女様に使える猫だニヤ

ン」

優美「どうして、私をこんなところに……」

と、昇平が上手から入ってくる。

昇平「私がお連れしたんですよ」

優美「カササギ……どうして」

昇平「ご無礼をお許してください。ただ、私は  
どうしてもあなたをお慕いしておりました」

優美「カササギ……」

×

×

×

前のめりで見ている健次郎。

× × ×

上手から入ってくる啓司、麗子、怜奈。

啓司「それじゃあ、今朝までは織姫はいたん

だね」

麗子「ええ。ただ彦星様、早く織姫様を見つ  
けなければ、天帝様が……。それに機織り  
も進みません」

啓司「そうだな……」

怜奈「機織りができる人間を、地上回まで今  
ミシヤが探しに行っております」

啓司「何とか、ここを乗り切らなければ……」

× × ×

会場後ろで見ている山中。

× × ×

下手舞台袖で待機している雅也と浩太。

雅也「（牛の角の被り物をして）いよいよだ  
……」

浩太「うっちー、頑張ろう。俺たちならいけ  
る」

雅也「うん……」

と、舞台が暗転し、浩太が舞台上に出てスタンバイをする——舞台が明転。

浩太「ああ、香苗に打ったLINEが既読にならない……。講義やサークルで、香苗にかまってあげられなかったからかな……。…」

と、雅也が舞台上に上がってくる。

雅也「こんばんは！」

と、会場からドツと笑いが起こる——

鈴川、真保、健次郎も笑っている。

浩太「うわ！ え、誰？」

雅也「あ、どうも牛です」

浩太「牛？」

雅也「ほら、角あるでしょ」

浩太「いや、そういうことを言ってるんじゃないよ。……てか、ここ俺の部屋だけど、どっから入ってきたんだよ」

雅也「玄関のドア開けっ放しでしたよ。今時不用心ですね」

浩太「牛って、どこの牛だよ」

雅也「申し遅れました。私、天の世界で彦星

様に飼われている牛です」

浩太「彦星？ え、七夕？」

雅也「ザッツライ！」

浩太「何だこいつ」

雅也「実は、織姫様がいなくなっちゃってしまっ  
て、その代わりに機を織っているのが、あなた  
がお付き合ひしてる香苗さんなんです」

浩太「香苗が？」

雅也「天の世界の危機を救うには、あなた方  
地上世界の人間の力が必要なんです。さ、  
乗って！」

浩太「え……」

雅也「香苗さんに会いたいでしょ」

浩太「会いたい」

雅也「はい、じゃあ行きましょう」

浩太「分かったよ」

と、渋々雅也の背中に乗る——雅也、  
浩太を背負いながら下手はけ。

× × ×

エンディングテーマが流れ、キャスト

一同がカーテンコールで集まっている。  
麻美「本日はご来場いただき、ありがとうございます」  
「ございました」

一同「ありがとうございましたッ」

拍手をする観客たち——鈴木、真保、  
健次郎も拍手をしている。

## 12 飲食店

キャストスタッフ一同がそろって、楽しい雰囲気の中で打ち上げをしている。

N「見送りや撤収が終わり、夜になるとキャストスタッフが一堂に会して打ち上げが行われ、それは楽しい時間でした。そしてこの打ち上げの席で、国枝さんから二期生メンバー募集、九月末のライブハウスでの歌唱ライブ、年明け二月の『市民演劇祭』に出場すること、その作品の脚本と演出を僕が担当することが発表されました」